

仮設の孤独死防げ

自治会・集会所の整備急務

東日本大震災の発生から11日で4カ月。仮設住宅への入居が進む被災地で、住民の孤立を防ぐコミュニティづくりが課題になっている。自治会の設立が遅れたり、交流の場となる集会所が用地不足でつくれなかつたりするところが多い。

国土交通省によると、入居したか入居者が決定済みの仮設住宅は、宮城、岩手、福島、福島の3県で計約3万5千戸（5日現在）。

宮城県石巻市によると、同市では約30カ所の仮設住宅団地に被災者が入居。しかし、自治会が設立された団地はない。市は抽選で入居者を決定、その結果、仮設に入居して初めて顔を合わせると、住民が多く、役員の引き受け手がいないという。

担当者は「被災者の孤立を防ぐには、住民同士のつながりが必要だが、食料支援などに時間を取られ、コミュニティづくりへのアプローチが遅れた」と話す。ボランティア団体などに協力を求め、仮設団地のリーダーや自治会づくりを早く進めたいという。

被災地では津波被害により、住民が元々住んでいた場所に仮設住宅をつくれず、遠方の高台などに設置されたケースが多い。抽選で様々な地区から入居者を選んだ自治体も多く、震災前の地域コミュニティの

分析が生じている。

阪神大震災（1995年）では、仮設住宅が存続した99年までの4年9カ月間で、誰にもみとられず孤独死した人が233人に上った。この教訓をもとに自治会リーダーらによる見守り活動や、住民の交流の場となる集会所の設置などが重要、と指摘されてきた。

岩手、宮城両県は50戸以上の仮設団地に集会所を設置する方針だ。しかし、岩手県内の50戸以上の87カ所のうち、設置済み・設置予定は36カ所にとどまる。県によると、集会所より住宅の建

設を優先したためという。宮城県では50戸以上の団地109カ所のうち102カ所で集会所を設置。しかし、自治会ができておらず、集会所を使えないままの仮設団地もある。（宋光祐）

世界一の時間へ
— PROUD —
野村不動産



仮設住宅の集会所でボランティアと話し、笑顔を交わす赤間次男さん（宮城県名取市）



斎藤清子さんは1日の大半を手押し車に座って過ごす（宮城県石巻市、いずれも宋光祐）

宮城

「1カ月近くほとんど誰ともしゃべってない」。宮

城名取市の箱塚仮設住宅で先月24日に開かれた高齢者向けのお茶会。赤間次男さん（84）は会が終わった後、ポツリと漏らした。

赤間さんは、市内の別の仮設住宅で暮らす。しかし、そこでは自治会が立ち上がっておらず、住民同士が集える会もない。そのため、震災前からの知り合いが多く住む箱塚仮設まで自転車で行って来た。

お茶会のあった集会所には、一人暮らしのお年寄りら約10人が集まった。ボランティア団体のメンバーが1時間半、話し相手を務めた。赤間さんは「一人暮らしで毎日退屈だ」とこぼした。

赤間さんは10年前に妻をがんで亡くした。若い頃に視神経を患い、視界の中心部分がほとんど見えない。

同県石巻市の斎藤清子さ

1カ月誰とも話してない ■ 知り合いがいない

仮設に入居後、買い物に出た時に何度かあいさつされたが、相手の顔がわからず、話はできなかった。

無言でテレビの前に座る日々が続いた。そんな赤間さんをお茶会に誘ったのは、箱塚仮設住宅で自治会長を務める大脇兵七さん（72）だ。

大脇さんの目標は、入居者の孤独死や自殺を出さないことだという。集会所を拠点に、お茶会のほか、未就学児と母親の集まりを企画している。8月には夏祭りも予定する。「家にもこれば孤立感はある一方だ。とにかく外に出てもらう機会をつくりたい」

仮設に入居した仮設住宅

ん（84）は仮設住宅の6畳一間の部屋で、手押し車に座ったまま一人で過ごす。骨粗鬆症を患っており、地震発生時、胸と腰を骨折した。避難所や病院など計4カ所を回った後、5月14日に仮設に入った。

バリアフリーになっていないことは、入居して初めて知った。玄関には階段があり、トイレの入り口には約15センチの段差があった。できるだけトイレに行かないように、紙おむつをはく。浴室内に手すりがなく、床も滑るため、靴下をはいてシャワーをあびる。流し台の位置が高いため、ベッドの上で調理する。